原発性非小細胞肺癌切除例における核DNA量に関する基礎的ならびに臨床的研究

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 林, 義信, Hayashi, Yoshinobu
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/14859

学位授与番号	医博甲第971号
学位授与年月日	平成3年3月25日
氏　　名	林　義信
学位論文題目	原発性非小細胞肺癌切除例における核ＤＮＡ量に関する基礎的ならびに臨床的研究
論文審査委員	主査　教授　岩　喬 副査　教授　橋本和夫 教授　宮崎逸夫

内容の要旨および審査の結果の要旨

原発性非小細胞肺癌切除例318例を対象に核ＤＮＡ量を測定し，生物学的予後因子としての意義について検討した。核ＤＮＡ量はパラフィン包埋ブロック1,525個から得た検体にフェルゲンによる核染色を行ってフローサイトメトリーにて測定した。原発巣については腫瘍最大割面全体のパラフィン包埋ブロックを使用した。核ＤＮＡ量は，ヒストグラム上のＤＮＡ指標で評価し，腫瘍細胞と正常細胞の核ＤＮＡ量が相対的に等しいと考えられた場合，これをＤＮＡ二倍体腫瘍（以下，Ｄ型）とし，一方，これが異なる場合をＤＮＡ異数倍体腫瘍（以下，Ａ型）とした。得られた結果は以下のごとくである。

(1) 核ＤＮＡ量の測定は原発巣の98.4％で可能であり，原発巣313例の測定の結果，Ｄ型は78例（24.9％），Ａ型は235例（75.1％）であった。 (2)原発巣がＤ型を示し，かつ，リンパ節転移を認めた症例48例中22例（45.8％）で転移巣にＡ型を示す腫瘍細胞の出現を認めた。(3)原発巣・リンパ節転移巣ともにＡ型であっても，それぞれの最大ＤＮＡ指標には全く相関を認めなかった。 (4)臨床病理学的因子である年齢，性，腫瘍径，術後病期，術後ＴＮＭ因子，組織型，分化度と原発巣の核ＤＮＡ倍体様式との間には，いずれも有意な相関を認めなかった。 (5)原発巣Ｄ型78例の術後5年生存率（以下5生率）が48.0％であるのに対して，Ａ型235例では23.8％と，有意にＡ型の予後が不良であった。 (6)進行肺癌であるⅢ期例では，原発巣のみの検討では有意差を認めなかったが，転移巣の核ＤＮＡ量も考慮した結果，原発巣・転移巣のいずれかにＡ型腫瘍巣を認めた137例の5生率10.5％に対し，原発巣・転移巣ともＤ型であった14例の5生率は58.9％となり，有意に予後良好であった。 (7)転移陽性リンパ節レベルが5レベル以上の症例は全例，原発巣または転移巣にＡ型腫瘍細胞の存在を認めた。 (8)Coxの比例ハザードモデルによる多変量解析でも，原発巣または転移巣にＡ型腫瘍細胞の存在を認めることが他の臨床病理学的所見とは独立した予後因子であることが示された。 (9) 腫瘍巣全体がＤ型と判定された群では胸郭内再発が有意に多いのに対し，Ａ型群では遠隔転移による再発例が多かった。

以上，本研究は，核ＤＮＡ量を用いて肺癌の予後を予測する可能性を示したもので，腫瘍外科学上，有用な論文と評価された。